慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	がん患者向けディシジョンエイドを系統的に開発し活用できる医療者育成プログラム開発
Sub Title	Development of an educational program on the systematic development and use of decision aids for healthcare professionals in oncology
Author	大坂, 和可子(Osaka, Wakako) 中山, 和弘(Nakayama, Kazuhiro) 米倉, 佑貴(Yonekura, Yuki) 青木, 裕見(Aoki, Yumi)
Publisher	
Publication year	2023
Jtitle	科学研究費補助金研究成果報告書 (2022.)
JaLC DOI	
Abstract	本研究ではがん患者の意思決定への参加を促進するDecision aids (DA) の系統的開発とDAを活用した意思決定支援ができる医療者育成教育プログラムを開発し評価した。ニーズ把握、既存の教育プログラムの情報収集等に基づき、汎用性のあるプログラムを設計し修正を重ねた。医療者40名にプログラムをオンラインオンデマンド型で提供し、受容性や満足度等を評価した結果、プログラム全体に満足しており患者の支援に役立つと9割の対象者が回答した。受講後にDAを活用したいと回答した者は9割、DAを開発したいと回答した者は6割であり、本プログラムが、医療者のDA開発、活用意図を向上する可能性が示唆された。 In this study, we developed and evaluated the acceptability of a web-based educational program on the systematic development and use of decision aids (DA) for healthcare professionals in oncology. Based on a needs assessment of healthcare professionals and information about existing educational programs, we designed a web-based educational program available to healthcare professionals not only in oncology but also in a variety of specialties. We conducted an acceptability study. A total of 4o participants completed the post-program acceptability survey. 90% of the participants were satisfied with the program. In addition, 90% of the participants indicated that they would like to use DA and 60% of the participants indicated that they would like to develop DA. Our findings suggest that this web-based educational program could improve learners' intentions to develop and use DA.
Notes	研究種目 : 基盤研究 (C) (一般) 研究期間 : 2018 ~ 2022 課題番号 : 18K10291 研究分野 : 看護学
Genre	Research Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KAKEN_18K10291seika

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　 ６ 月　 ４ 日現在

機関番号：３２６１２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2022
課題番号：１８Ｋ１０２９１

研究課題名（和文）がん患者向けディシジョンエイドを系統的に開発し活用できる医療者育成プログラム開発

研究課題名（英文）Development of an educational program on the systematic development and use of decision aids for healthcare professionals in oncology

研究代表者
大坂　和可子（OSAKA, Wakako）

慶應義塾大学・看護医療学部（信濃町）・准教授

研究者番号：７０３２２３４４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究ではがん患者の意思決定への参加を促進するDecision aids（DA）の系統的開発とDAを活用した意思決定支援ができる医療者育成教育プログラムを開発し評価した。ニーズ把握、既存の教育プログラムの情報収集等に基づき、汎用性のあるプログラムを設計し修正を重ねた。医療者40名にプログラムをオンラインオンデマンド型で提供し、受容性や満足度等を評価した結果、プログラム全体に満足しており患者の支援に役立つと9割の対象者が回答した。受講後にDAを活用したいと回答した者は9割、DAを開発したいと回答した者は6割であり、本プログラムが、医療者のDA開発、活用意図を向上する可能性が示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
我が国でも、がん領域はもちろんのこと、様々な領域において患者の意思決定支援の質向上の重要性が増しているが、DAの系統的開発と活用に関する医療者向け教育プログラムは、まだ存在していない現状であった。本研究によって、がん領域だけでなく、様々な領域の医療者も受講できる汎用性の高いDA活用と開発に関する教育資源が開発され、評価の結果から、受講満足度が高く、DA活用意図、開発意図に影響を与える可能性が示された。対象者から改善点に関する意見も得られたので、よりよい教育プログラムへの改善が可能である。将来的に日本全国の医療者が受講できれば、我が国の意思決定支援の質向上へ貢献できる可能性がある。

研究成果の概要（英文）：In this study, we developed and evaluated the acceptability of a web-based educational program on the systematic development and use of decision aids (DA) for healthcare professionals in oncology. Based on a needs assessment of healthcare professionals and information about existing educational programs, we designed a web-based educational program available to healthcare professionals not only in oncology but also in a variety of specialties. We conducted an acceptability study. A total of 4o participants completed the post-program acceptability survey. 90% of the participants were satisfied with the program. In addition, 90% of the participants indicated that they would like to use DA and 60% of the participants indicated that they would like to develop DA. Our findings suggest that this web-based educational program could improve learners' intentions to develop and use DA.

研究分野：看護学

キーワード：意思決定支援　教育プログラム　ディシジョンエイド　がん　医療者

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

がん医療はめまぐるしい発展を遂げ、エビデンスのある治療がガイドラインに沿って提供される時代となった。がん患者の 5 年、10 年相対生存率は改善傾向にあり、がんサバイバーの増加が見込まれる今、生存率と生活の質（Quality of Life；QOL）の両立を目指した治療選択が重視されるようになっている。しかし、複雑で不確実性を伴う医療情報を理解し、自分の価値観と照らし合わせた選択を迫られるがん患者と家族の葛藤は計り知れない。欧米では、どちらを選んだとしても利益と不利益があり、患者の価値観が決定に影響する難しい決定（Preference-sensitive decision）の支援として、シェアドディシジョンメイキング（Shared Decision Making; SDM）と、それを促進するディシジョンエイド（Decision aids; DA）に関する研究が盛んに行われている。DA は、印刷物、インターネット等で提供される意思決定支援ツールである。DA を活用した SDM のメリットは、決めるのが難しい選択において、選択肢に関する最新の利益と不利益に関するエビデンス情報を中立的な立場で正確にわかりやすく提示し、患者と医療者が決めるプロセスを見える化し、共有できることにある。1995 年に、DA の質を評価する国際基準（International Patient Decision Aids Standard Collaboration Criteria; IPDAS）が開発され、質の高い DA 提供により意思決定の葛藤低下や、知識の向上といったエビデンスが確立された。これにより、質の高い DA を蓄積しウェブサイトで公開する組織も複数あり、がん領域では前立腺がん、乳がんをはじめとする悩ましい治療選択についての DA が多数揃っている。医療者が患者に質の高い DA を提供し、SDM を実践する環境が整いつつある。わが国でも、難しい選択に関するがん患者の支援ニーズは高く、例えば、早期乳がん術式選択は、生存率の差がないが、ボディイメージや QOL に影響するため、意思決定の葛藤を伴う難しい選択の１つである。

DA を活用した SDM が、我が国の他の治療選択においても有効であると推測されるものの、国際基準や系統的開発方法に基づいたがん患者向け DA は、研究開始当初の段階で、乳がん術式選択の DA のみである。難しい選択に悩むがん患者の SDM を充実する上で、系統的 DA 開発と DA を活用した意思決定支援ができる医療者を育成し、支援体制を整備することが急務の課題と考えた。また、系統的 DA 開発と開発した DA を臨床で活用した支援の教育を合わせて提供することで、DA 開発研究と臨床活用のギャップを小さくすることが可能になると考えた。

２．研究の目的

本研究は、がん患者の意思決定への参加を促進する DA の系統的開発と、DA を活用した意思決定支援ができる医療者を育成する教育プログラムを開発し評価することを目的とした。

３．研究の方法

（1）医療者のニーズの把握

がん領域において、開発すべき DA はどのようなものか、DA 開発過程における学習ニーズ、DA 活用に関する学習ニーズについて、医療者にヒアリングを行った。

（2）既存の教育プログラムに関する情報収集

2018 年度に、Ottawa 大学にて開発された Ottawa Decision Support Tutorial (ODST)をオンラインで受講した。同じく Ottawa 大学にて開発されたワークショップ「Interprofessional approach to shared decision making (IP-SDM): A workshop for healthcare professionals」（日本での開催）に参加した。また、ワークショップ講師の Laura Boland 氏より、カナダの SDM の現状や、教育プログラムの内容に関する情報を得た。また、詳細に DA 開発に関する情報を集積している Ottawa decision aid ウェブサイトおよび International Patient Decision Aids Standards (IPDAS) Collaboration ウェブサイトのコンテンツ等の情報を収集した。

（3）DA 開発者向けの教育プログラムの設計と修正

DA 開発に必要な情報を整理し、DA 開発者向けの講義資料を作成した。当初の計画では、がん患者向けの DA の開発と活用に特化した教育プログラムを計画していたが、患者の価値観が決定に影響する難しい決定（Preference-sensitive decision）はがん領域に限らないこと、他領域の医療者の DA 開発の学習ニーズがあることから、がん患者だけでなく他疾患患者向けの DA 開発にも活用できる汎用性を考慮した教育プログラムを検討することとした。

2020 年度には、DA 開発に多職種で取り組む 1 グループ（重症心不全の DT 治療（Destination therapy：長期在宅補助人工心臓治療)に関する DA）を対象とし、オンラインリアルライブ型で、DA 開発に関する情報提供と質疑応答を行った。また、希望者には録画した講義を視聴できるようにして、実施後に、同意の得られた受講者を対象とし講義のわかりやすさ、学習ニーズについてフィードバックを得た。2021 年度に、フィードバック結果と研究者間の検討により、プログラムを修正し、DA 開発に関心を持つ医療者及び研究者を対象としたワークショップを 1 回開催し、参加者よりフィードバックを得た。

（4）DA 活用と開発に関する教育プログラムの設計と評価

（3）の実施後、研究者間で再検討し、DA 開発者向けの教育プログラムに、臨床で DA を活用したいと考えている医療者のための内容を加え、教育プログラムへ再構成した。また、日本のどこからでも参加できるよう全てオンラインオンデマンド型での提供に修正した。

設計後、教育プログラムの評価を実施した。評価は、協力の得られた医療者に教育プログラムを受講してもらい、プログラムに対する受容性と受講満足度の程度、学習ニーズ、教育プログラムの改善点を明らかにすることを目的とした。研究対象は、SDM と DA 活用・開発に関心を持つ医療者で、臨床経験 3 年以上、研究参加時、医療機関、研究機関、医療系大学に所属している（大学院生含む）医療専門職（医師、看護師、助産師、心理士、薬剤師、作業療法士、理学療法士、栄養士、社会福祉士など）とした。研究対象者は、研究に同意後、受講前のオンラインアンケートへの回答後、オンライン教育プログラムを受講し、受講後にオンラインアンケートへ回答した。データは、Survey monkey®を用いて収集した。受講前のデータ収集項目は、属性 8 項目（年齢、性別、職種、役割など）、SDM の知識、経験や態度等に関する項目であり、受講後のデータ収集項目は、視聴状況 1 項目、3 つの学習内容のわかりやすさ、長さについて、ワークシートの活用有無、役立ちそうかどうか、教育プログラム全体の受容性、受講満足度、活用意図、開発意図、学習ニーズ、改善点に関する自由記載等であった。受容性および受講満足度の質問項目は、Bowen ら（2009）、Stacey ら（2012）、Boland ら（2019）の受容性評価項目を参考に研究者らが作成し、学習ニーズに関する項目は、(3) のフィードバック結果や、研究者らの検討により作成した。

４．研究成果

(1) 医療者のニーズの把握

開発すべき DA はどのようなものか、DA 開発過程における情報ニーズについて、医療者にヒアリングを行った結果、開発すべき DA では、がん領域では、遺伝性腫瘍に関する DA や乳房再建に関する DA、妊孕性に関する DA などが求められていた。がん領域では、遺伝性腫瘍に関する DA、乳房再建に関する DA、他領域では、産科領域の無痛分娩に関する DA を、開発希望のある医療者と共同開発した。共同開発した DA に関する情報は、研究者が運営する意思決定ガイドウェブサイト（https://www.healthliteracy.jp/decisionaid/）に掲載した。DA 開発過程の情報ニーズでは、系統的開発手順に関する知識、DA 国際基準に沿って開発する際の専門用語に関する知識、DA 開発が適している内容かどうかの検討方法についての知識へのニーズなどがあった。DA 開発に取り組んでいる医療者らは、伝えたい情報を盛り込むと情報量が多すぎてしまったり、いかにわかりやすく伝えるかに悩んでいることがわかった。

DA 活用に関する学習ニーズでは、自分自身は DA を活用した意思決定支援を行っているが、組織内で他のメンバーを巻き込むことに困難さがあり、組織全体で DA を活用して支援を行うには、より多くの医療者が気軽に知識を得られる環境が必要とされていることがわかった。

(2) 既存の教育プログラムに関する情報収集

受講した Ottawa Decision Support Tutorial（ODST）は、オンラインで世界中どこからでもアクセスが可能であった。10 セクションから構成され、SDM、意思決定支援の枠組み、意思決定の葛藤、支援方法、ケーススタディなどについて、テキスト形式の文章を順に読み進めるものであった。各セクションを読み終えると、次のセクションに進む前に知識確認テストがあり、最後の知識テストに合格すると修了証が発行された。分割して受講することができたので、受講しやすかった。ODST の受講と知識テストに合格すると、ワークショップ「Interprofessional approach to shared decision making（IP-SDM）: A workshop for healthcare professionals」を受講できる。このワークショップを開催できるのは、オタワ大学の Dawn Stacey 氏と Laura Boland 氏の 2 名のみである。Laura Boland 氏による日本でのワークショップ開催時に研究者らも参加した。このワークショップは、日本語通訳時間を含め、午前 2 時間、午後 3 時間で開催された。ワークショップは、講義、小グループでのロールプレイ、ディスカッションが含まれていた。ワークショップ講師の Laura Boland 氏からの情報収集からは、カナダでも SDM を好まない医療者もいること、誰が最適な支援者かは、その施設やチームによって異なること、ワークショップを開催しても、臨床で SDM を実施している人ばかりではないこと、現場で何が阻害要因になっているか確かめ、その阻害要因を取り除くにはどうしたらよいかディスカッションをすることが大切であり、このワークショップにもディスカッションの時間を設けているとのことだった。このワークショップは、職種や専門領域を問わず参加が可能であったが、参加して運営上支障がないことを確認できた。このワークショップは、DA 開発者向けではなく、実際に DA を活用する医療者向けであり、DA 活用の教育プログラムの設計には有用な情報を多く得られた。ただし、日本で活用できる DA がまだほとんど存在しないこと、DA 活用を促進する上でも、DA が増えることが必要であることから、まず DA 開発者向けの教育プログラムから設計することとした。

(3) DA 開発者向けの教育プログラムの設計と修正

2020 年度、DA 開発に多職種で取り組む 1 グループを対象として、DA 開発者向けの講義と質疑応答を実施した。その結果、同意の得られた受講者のうち 12 名より、無記名にてフィードバックを得た。回答者の内訳は、医師 2 名、看護師 6 名、薬剤師 3 名、MSW1 名であった。内容について「わかりやすい」と回答した者が 12 名（100%）であった。学習ニーズでは「質の高い DA

の作り方」、「うまくいった点、失敗談など実際の体験談が分かりやすい」などが挙げられた。開発した DA に関する情報は、研究者が運営する意思決定ガイドウェブサイト（https://www.healthliteracy.jp/decisionaid/）に掲載した。

2021 年度、プログラムを修正した。講義（オンデマンド講義動画の視聴）（全体で約 2 時間）、個人ワーク（ワークシートを活用した DA 試作版づくり）、ワークショップ（受講者が集まるオンラインリアルタイムのワークショップ）（約 2 時間）で構成した。講義内容は International Patient Decision Aids Standard （IPDAS） Collaboration の最新レビューに基づく知見を反映し、日本の事例として研究者の開発した DA 改訂版を具体例として解説することで親しみやすくなるようにした。DA の開発を進めやすくするためのワークシートを 4 種類作成し個人ワークに取り組めるようにした。講義受講後、個人ワークに取り組む中で生じた質問を事前にオンラインで受け、ワークショップ当日、参加者の質問内容に沿って解説し、希望者は、開発中の DA を提示しアドバイスを受けられる構成とした。このプログラムを約 20 名の希望者が参加した（ワークショップは 1 回開催）。受講者のうち 11 名より、無記名にてフィードバックを得た。回答者の内訳は、医師 1 名、看護師 5 名、助産師 3 名、薬剤師 2 名等であった。内容はわかりやすく今後の役に立つと回答した者が多く、特にワークショップについて肯定的な意見が多かった。このワークショップ参加者は、教育機関に勤務する者が 6 割であり、過去に意思決定支援の研修や講義に参加したことのある者が 7 割であり、DA 開発に非常に関心の高い集団であったことが、これらのフィードバックに影響している可能性があった。ワークショップは約 2 時間であったが、その 1 ヶ月程度前より、オンデマンド講義動画を視聴し、個人ワークに取り組む必要があるため、今後の普及への懸念が考えられた。DA 開発を希望する医療者は、DA を活用する医療者に比べて圧倒的に少ないことが研究プロセスを通して見えてきたため、DA 活用と DA 開発に関する教育プログラムの設計にあたって、DA を活用する医療者も受講しやすくするため、全体の時間短縮を図り、すべてオンラインオンデマンド型での提供に修正することとした。

（4）DA 活用と開発に関する教育プログラムの設計と評価

①DA 活用と開発に関する教育プログラムの設計

教育プログラムの目標は、DA とは何か理解する、DA のしくみを理解する、DA の開発と評価のプロセスを理解する、DA の質を評価する国際基準を理解する、DA 開発と評価の計画立案方法を理解する、DA の活用方法を理解する、DA 提供の効果を理解するとした。学習方法は、自分のペースで学習できるオンライン学習（パワーポイントを用いた講義動画の視聴（図 1）、補足資料：ワークシート）とした。研究に同意の得られた対象者に、研究対象者用ウェブページを限定公開した（図 2）。研究対象用ウェブページにアクセスすると、研究参加手順、動画視聴、資料ダウンロード、アンケート回答がすべてオンラインでできるようにした。学習内容（所要時間）は、「1. ディシジョンエイドとは？」（約 20 分）、「2. ディシジョンエイドの作り方」（約 30 分）、「3. ディシジョンエイドの使い方、効果」（約 20 分）とし、DA 活用に関心がある医療者も、DA 開発に関心がある医療者も同じコンテンツで、同じ順番で視聴する構成とした。これは、DA 活用に関心がある医療者も、DA がどのように作られているのかを理解した上で、臨床で DA を活用する方がより理論に基づいて実践出来ると考え、また、DA 開発に関心がある医療者も、実際に DA がどのように活用出来るのか、その効果にはどのようなものがあるのかを理解して DA 開発に取り組む必要があると考えたからである。



図 1. 講義動画スライドの一部



図 2. 研究対象者用ウェブページの一部

②DA 活用と開発に関する教育プログラムの評価

研究対象者は 40 名であった。平均年齢 43.5 歳、平均臨床経験年数 15.6 年、男性 10 名、女性 29 名、無回答 1 名、職種は、医師 15 名、看護師 13 名、助産師 4 名等であった。専門分野は、がん 14 名（35%）であり、慢性疾患 16 名（40%）、高齢者 11 名（27.5%）等であった。教育プログラム受講前に意思決定支援の研修を受けたことがある者は 27 名（67.5%）、DA 活用や臨床導入に関心がある者は 40 名（100%）、DA 開発や評価に関心のある者は 38 名（95.0%）、DA 開発経験のある者は 9 名（22.5%）であった。

31 名（77.5%）が、3 つの講義動画を 1 回ずつ視聴していた。講義動画のわかりやすさについて、「とてもそう思う」～「全くそう思わない」の 5 段階で尋ね、「とてもそう思う」を 4 点、「全くそう思わない」を 0 点とした場合、「1. ディシジョンエイドとは？」のわかりやすさの平均点は 3.75 点、「2. ディシジョンエイドの作り方」の平均点は 3.43 点、「3. ディシジョンエイドの使い方、効果」の平均点は、3.58 点であった。また、長さは、「1. ディシジョンエイドとは？」では、「ちょうどよい」38 名（95%）、「やや長い」2 名（5.0%）、「2. ディシジョンエイドの作り方」では、「ちょうどよい」27 名（67.5%）、「やや長い」11 名（27.5%）、「やや短い」1 名（2.5%）、「3. ディシジョンエイドの使い方、効果」では、「ちょうどよい」37 名（92.5%）、「やや長い」2 名（5.0%）であった。これらの結果から、講義動画では「2. ディシジョンエイドの作り方」において、内容や長さの改善の余地があることがわかった。

「この教育プログラムに満足している」に対し、「とてもそう思う」18 名（45.5%）、「そう思う」18 名（45.5%）、「どちらでもない」4 名（10.0%）であり、9 割の研究対象者が、満足していると回答した。「この教育プログラムは、難しい決定が必要な患者の支援に役立つ」に対し、「とてもそう思う」19 名（47.5%）、「そう思う」15 名（37.5%）、「どちらでもない」4 名（10.0%）、「あまりそう思わない」2 名（5.0%）であった。

DA 活用意図「今後、DA の活用に取り組んでみようと思う」では、「とてもそう思う」20 名（50.0%）、「そう思う」18 名（45.5%）、「どちらでもない」2 名（5.0%）であり、DA 開発意図「DA の開発に取り組んでみようと思う」では、「とてもそう思う」14 名（35.0%）、「そう思う」12 名（30.0%）、「どちらでもない」8 名（20.0%）。「あまりそう思わない」5 名（12.5%）、「全くそう思わない」1 名（2.5%）であった。

プログラムの満足度と、役立ち度、DA 活用意図、DA 開発意図それぞれの相関係数を算出したところ、いずれも正の有意な相関があった。プログラムの満足度と役立ち度の相関係数は 0.556（$p<.001$）、プログラムの満足度と DA 活用意図では相関係数 0.435（$p<.001$）、プログラムの満足度と DA 開発意図では相関係数 0.530（$p<.001$）であった。

受講に関するニーズでは、受講方法として「オンラインオンデマンド型」を希望する者が最も多く 24 名（60%）、次いで多かったのは「事前学習をオンデマンド型で実施した上で、対面でロールプレイ、ワークショップを組み合わせる形式」25 名（62.5%）であった。

今後の追加点として回答が多かったのは、「臨床において、多職種協働で DA を活用する方法」27 名（67.5%）、「臨床において、DA を組織で取り入れ実装する方法」26 名（65.0%）であり、DA 開発に関連する項目は、いずれも希望する者が 2 割～3 割程度であった。

自由記載では、受講は DA 活用と開発で分けた方がよいという意見が複数出された。また、ワークシートのデザインの改善、講義動画の音声やテンポ（動画が途中で止まってしまった）、実際の活用場面があるとよい、DA の開発は情報量が多く感じた、ロールプレイで学んでみたいなどの意見が出された。今回の研究対象者は、主な活動場所を臨床と回答する者も多く、DA 活用へのニーズの高さが、DA 開発の講義動画への評価に影響している可能性がある。今回の結果を受け、DA 活用のニーズがある医療者と、DA 開発のニーズがある医療者が、それぞれニーズに合わせながら双方を学べる教育プログラムへ修正する必要性が示された。また、より具体的な実践例を入れながら解説するなど、本研究で得られた結果を踏まえ、よりよい教育プログラムへ改善する予定である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計7件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　4件）

１．著者名 大坂和可子	４．巻 25巻2号
２．論文標題 患者中心の意思決定を支えるツール ーディシジョンエイドの開発・活用・普及・教育ー	５．発行年 2022年
３．雑誌名 聖路加看護学会誌	６．最初と最後の頁 42-45
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34414/00016550	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 素輪善弘，大坂和可子	４．巻 183号
２．論文標題 個々の患者に最適な乳房再建を選択するためのshared decision making	５．発行年 2022年
３．雑誌名 ペパーズ（PEPARS; Perspective Essential Plastic Aesthetic reconstructive Surgery）	６．最初と最後の頁 47-55
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 大川 恵，大坂 和可子	４．巻 22
２．論文標題 BRCA病的バリアントを有する女性の乳房および卵巣の健康管理方法選択のためのディシジョンエイドの作成と当事者による内容適切性評価	５．発行年 2022年
３．雑誌名 遺伝性腫瘍	６．最初と最後の頁 9-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18976/jsht.22.1_9	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 石川 ひろの，武田 裕子，大坂 和可子，岡本 左和子，藤崎和彦	４．巻 12(1)
２．論文標題 多様性を理解し、支える医療コミュニケーション	５．発行年 2021年
３．雑誌名 日本ヘルスコミュニケーション学会雑誌	６．最初と最後の頁 19-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Eri Shishido, Wakako Osaka, Ayame Henna, Yuko Motomura, Shigeko Horiuchi	4．巻 15(11)
2．論文標題 Effect of a decision aid on the choice of pregnant women whether to have epidural anesthesia or not during labor	5．発行年 2020年
3．雑誌名 PLOS ONE	6．最初と最後の頁 e0242351
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1371/journal.pone.0242351	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 大坂 和可子	4．巻 5(62)
2．論文標題 【医療の場におけるチームで取り組む意思決定支援】治療の選択に関する意思決定支援 ディシジョンエイドを活用した支援	5．発行年 2020年
3．雑誌名 保健の科学	6．最初と最後の頁 315-320
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 大坂 和可子, 山内 英子	4．巻 3（3・4）
2．論文標題 乳房再建を含む乳癌術式決定における患者中心の意思決定支援とディシジョンエイド活用の動向	5．発行年 2018年
3．雑誌名 Oncoplastic Breast Surgery	6．最初と最後の頁 51-58
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20699/jopbs.3.3-4_51	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計6件（うち招待講演　4件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 大坂 和可子
2．発表標題 パネルディスカッション3 がん患者の持つ力に沿った意思決定支援のアウトカム「ディシジョンエイドを活用した意思決定支援におけるアウトカム」
3．学会等名 第37回日本がん看護学会学術集会（招待講演）
4．発表年 2023年

１．発表者名
大坂 和可子

２．発表標題
教育講演「患者中心の意思決定を支えるツール ディシジョンエイドの開発・活用・普及・教育」

３．学会等名
第26回聖路加看護学会学術大会（招待講演）

４．発表年
2021年

１．発表者名
大坂 和可子

２．発表標題
シンポジウム2 多様性を理解し、支える医療コミュニケーション 「Shared Decision Makingを促進する意思決定ガイドの活用」

３．学会等名
第12回日本ヘルスコミュニケーション学会学術集会（招待講演）

４．発表年
2020年

１．発表者名
大坂 和可子

２．発表標題
シンポジウムⅡ．医療における当事者・家族意思決定支援の実装「がん医療における意思決定ガイドを活用した意思決定支援の実装に向けた取り組みと課題」

３．学会等名
第40回日本看護科学学会学術集会（招待講演）

４．発表年
2020年

１．発表者名
Eri Shishido, Ayame Henna, Wakako Osaka, Naoko Arimori, Shigeko Horiuchi

２．発表標題
Development of a decision aid for pregnant women about analgesia before childbirth

３．学会等名
10th International SHARED DECISION making conference

４．発表年
2019年

１．発表者名
平安名 彩恵， 宍戸 恵理， 大坂 和可子， 堀内 成子

２．発表標題
自然分娩・無痛分娩を選択する女性への意思決定エイド 国際基準に合わせたエイド開発までの道のり

３．学会等名
母性衛生

４．発表年
2019年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕
患者さんやご家族のための意思決定ガイド
https://www.healthliteracy.jp/decisionaid/

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	中山　和弘 (NAKAYAMA Kazuhiro) (50222170)	聖路加国際大学・大学院看護学研究科・教授 (32633)	
研究分担者	米倉　佑貴 (YONEKURA Yuki) (50583845)	聖路加国際大学・大学院看護学研究科・准教授 (32633)	

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	青木　裕見 (AOKI Yumi) (40803630)	聖路加国際大学・大学院看護学研究科・准教授 (32633)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関